

令和 4 年 6 月 13 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00329

研究課題名(和文) 十九世紀末の西洋廉価版小説が明治・大正の文学作品に与えた影響

研究課題名(英文) Influences of 19th century Western cheap editions on Meiji and Taisho Eras literature

研究代表者

堀 啓子 (Hori, Keiko)

東海大学・文化社会学部・教授

研究者番号：60408052

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、明治時代から大正時代にかけて成立した日本の文学が、cheap editionsと総称される、十九世紀末の西洋の無名の廉価版小説から、様々な影響を受けて成立していることを調査してきた。研究の過程で、その影響関係が翻訳や翻案といった直接的なものにとどまらず、それらの原書を下敷きとして得たモチーフレベルでの影響関係も整理し、後代の作品にどのような展開をもたらしたのかを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

十九世紀末の無名の廉価版小説が、明治・大正の日本の文学に与えた影響と意味を再考するというこの研究は、従来はあまり焦点をあてられることのなかった分野であった。だが、明治・大正時代の日本の文学作品の成立を考える上では、看過できない問題であり、その関連を彷彿させる原著との比較によって、実際的な影響を明らかにし得た。

そして作家たちがそこで得た自らの新しい技法を以て、日本の文壇に再発信した作品は、その後の文士たちにも新しい創作手法を提示していったことをまとめた。

研究成果の概要(英文)： My research sheds light on how Japanese literature produced in the Meiji and Taisho Eras was influenced by Western cheap editions written in the 19th century.

During my research, I identified the original 19th century cheap editions that were translated and adapted for the Japanese audience of the time as well as described the similar motifs and storylines they share. The result of my research demonstrates how these cheap editions led to the development of Japanese modern literature.

研究分野：比較文学

キーワード：尾崎紅葉 小栗風葉 cheap editions Bertha M. Clay Charlotte M. Brame

1. 研究開始当初の背景

本研究は、日本の明治から大正期に成立した文学を欧米の文学と比較検証することを主眼としている。日本の文学と欧米の文学を比較するというテーマ自体は、もとより種々の視点、様々な角度から多くの研究がなされてきた。だが、そうした従来研究のほとんどに於いては、対象とする欧米の文学が、いわゆる名作文学のみに限られていた。

いっぽうで、明治・大正期の日本の文学のうち、欧米文学からの影響が認められる作品の中には、とりわけ、cheap editions と総称される十九世紀末の無名の廉価版小説からも、多くの要素を採り入れてきたものが少なからずあることはあまり知られておらず、それを対象とする研究はほぼなされていなかった。

報告者は、今までほとんど光をあてられることのなかったこの分野に着目することにした。文学青史には載らないものの、当時の日本の文学に看過しがたい影響を与えてきた無名の洋書小説を中心に研究を進めたいと考えたからである。そして、それらの cheap editions が同時代の日本文学に与えた影響を明らかにし、後代の作品にどのような展開をもたらしたのか、体系的に整理しようとして試みることにした。

2. 研究の目的

幕末に鎖国が解けた日本には、西洋からの科学や技術が多くもたらされてきた。それは文学の領域でも例外ではなく、日本の文士たちはとりわけ西洋から流れ込んできた当地の文学に、従来の日本の文学には見出し得なかった多くの新しい要素を看取していく。それらは、従来の日本文学にはなかった構想や文体、視点の設定や描写の写実性などである。それは、明治時代から大正時代にかけての、近代文学成立の黎明期において、革新をもたらすことになった。

不思議なことには、このとき文士たちに新たな世界を開いて見せたのは、必ずしも西洋文学の、いわゆる名作 だけではない。むしろ、現代では名前さえ伝わっていない無名の作者の無名の作品にも、当時の日本の文士たちは魅力を感じたのである。十九世紀末から二十世紀初頭の、特に英米では、読者層と読者人口の拡大を受けて、薄利多売を期して、通俗的な小説が廉価で大量に出版されるようになっていた。そうした通俗的な内容の廉価小説も日本にも流れ込んでいたからである。

ではなぜ、当時の日本の文士たちはそれらの無名の作品に着目し、そこから新しい表現手法を獲得しえたのか。例えば尾崎紅葉は、Bertha M. Clay という作家の *Weaker Than a Woman* という通俗的な内容の原著を換骨奪胎し、同時代の日本文学の白眉とされる『金色夜叉』を発表した。また黒岩涙香は、Marie Corelli による奇譚 *Vendetta* をもとに、型にはまった翻訳文体の常識を覆す新たな翻訳様式を『白髪鬼』で確立し、読者の喝采を浴びた。ほかにも当代一流の文士たちに、インスピレーションを与え、新たな表現技術の獲得に駆り立てていったのは、現代にその名がほとんど伝わらない洋書小説である。

こうした事例は、原著が無名であるがゆえに、従来の研究でもほとんど注目されてこなかった。しかし、日本の近代文学に名作を生み出させ、発展させた経緯を顧みると、これらの原著の存在と寄与は、看過しえない。

そのため本研究では、報告者は、当時の文士たちがどのようにして多くの無名の作品のうちから自身の志向に合う原著を選びすぐったのか、そしてどのようにしてそれらから日本の読者に受け入れられる名品を生み出してきたのか、結果的にどのような影響を後代の作品に与えていったのか、というテーマを以て研究を進めることとした。

具体的には、一部だけを改変した翻訳や翻案作品などに焦点を絞り、個々に原著との比較を試みることで、従来の日本文学にはない新しい文体や斬新な構想を、文士たちが獲得していったのか、そうしてその後につながる新たな手法を文学の世界に再発信していったのかを明らかにし、文学史における意味を再考することを調査の主たる目的とした。

3. 研究の方法

研究を進めるにあたり、調査過程として順に行うものと、同時並行的に進めるものがあった。具体的には、まず 明治・大正期の文士で、西洋の廉価版小説を好んで涉猟し、後進にも影響を与えた、森田思軒、黒岩涙香、尾崎紅葉、菊池寛らの作品から対象を絞り込んだ。実際の作業工程としては、原作の存在や原題については何の言及もないものの、影響関係が感じられる作品を研究対象として設定するところから、研究を開始した。設定の基準は、洋書からの影響がテキストそのものから明確に認識できた場合、及び、そうした文士が日常的に洋書から影響を受けていたことが明らかな場合、の二つのケースに限定することで、あまり範囲を広げすぎないことに留

意した。

次にこの過程を経て、同時期に日本に原書のままもたらされている無名の洋書小説のリスト化を試みた。個人輸入や知人の伝手などでもたらされた洋書はやはりまだ少なかった時代である。そのため、例えば同時代に書店を通じて日本に輸入され、文士たちが落手し得た可能性の高い作品のラインナップ、例えばニューヨークで爆発的な人気を博した *The Seaside Library* や *Lovell's Library* などのシリーズから整理を試みて、ストーリーが酷似していると思われた日本の作品との比較を試みた。

同時に、実際に影響関係が顕著である作品をとりあげ、その翻訳を实践した。この作品に関しては、明治時代に翻訳が、大正時代に翻案と目されるものが、それぞれ別々の文士の手によって発表されている。その比較を試みるために、報告者自身はその作品の翻訳を手掛けた。そしてそこに浮かび上がる原著との異動を顕現させることで、文士たちが得た技術と自らその上に発展させ、確立した技法を明らかにした。

4. 研究成果

報告者は本研究において、西洋の無名の小説から明治大正期の日本文学が何を学び、どのようにして新たな表現法を確立して後代の作品に伝えたかを明らかにすることを試みた。そしてそれをもとにした単著を上梓した。幸いにも同著は、複数の紙誌で書評を掲載して戴き、それがきっかけで同研究をもとにした講演などにも登壇させて頂いた。

本補助金を以て研究を続けさせて頂いた研究が、専門の研究分野のみならず一般の方々にも紹介させて頂く機会を得られたことは、僥倖であった。

明治・大正時代の日本の文学は、先にも述べたように、有名作品からのみ新たな文学世界を吸収したわけではなかった。廉価多売されていた無名の小説は、他の輸入洋書よりも格段に安く、文士たちも入手しやすかった。それゆえ文士たちはごく自然に、そうした身近な洋書から、シンプルで骨太な構想や、力強い文体を学んだのである。それを反映させたことで新たな分野を切り開き、さらにその影響によってそれを手がけた文士自身、あるいは彼らに続く後代の文士たちに新しく、豊かな物語世界を示し得たことを整理し得たことが、本研究の主たる成果である。

具体的には、彼らが学んだ、劇的な展開やストーリーラインを形成する主題、個性ある魅力的な登場人物などは、まさに無名で通俗的な作品ならではの武器であった。それらを日本風に直すのは容易なことではなかったが、そうした多彩な要素は、国境を越えて日本の読者にも大いにアピールするものになった。文芸的価値の高い、何世紀も読み継がれる名著ではなく、一時的な娯楽として読み捨てられる傾向の作品であるからこそ、その刹那の読者の心を魅了する強力な何かがある。それを潜在的に感じ取った日本の文士たちがいち早く自作に反映させていったのであり、その過程と得られたものを明らかにし得たこと、それが本研究の目的から導き得た成果である。

なお、今回の研究中に起きた、予期し得なかったできごとは世界的な感染症の蔓延であった。そのため、この研究の遂行のために予定していた国内外での現地調査が事実上不可能になり、調査し得た文献に限界が生じた。ただ、それがゆえにかろうじて入手し得た資料に集中し、精査することで逆に視野を広げることができた点もある。例えば、調査対象としていた尾崎紅葉についてである。紅葉自身は廉価版洋書から大きな影響を受けていた。ただ、その手法は、弟子たちに必ずしも西洋の作品や原書に関わらず、他の東洋の国々からもたらされている作品や、翻訳でも、今まであまり重視されてこなかった無名の作品をモチーフとして取り入れる手法としても受け継がれていることが、新たな知見として獲得できた。

最終的に、研究遂行上の困難は、やはり先行研究が少なく、調査対象とし得る文献が国内はもとより国外に於いても限られていたことにある。名高い文豪の名著ならば、日本の文士たちもその原著名を明らかにした上で、翻訳や翻案、パスティーシュなども発表している。原作者に対する敬意がそうさせるからである。その場合、両者の比較は容易になる。例えば、坪内逍遙にとってのシェークスピアや、夏目漱石のカーライルなど、文士自身も私淑していることを明言しているため、比較研究の立脚点がしっかりとしており、そこから多くの優れた先行研究も生みだされている。

いっぽうで無名の洋書小説にはある種、消費されるものという認識が根強かった。そのため、たとえストーリーラインが原作に酷似しているような翻案であろうとも原著が無名の場合、文士たちが必ずしも原題を示さなかったのである。著作権に対する認識も現代とは大きく異なっていた時代であり、そもそも著作権の概念自体が十分に浸透していなかった時代であって、そうした文士たちの対応は不思議なものではない。ただ結果的に、提示される原作の情報が極端に少なく、そこにこの研究自体の難しさがある。いっぽうでは、それが依然としてこの研究に残されている余地であり、報告者自身の今後の継続的な研究課題でもある。

今後の展望として、報告者は今回助成して戴いたこのテーマでの研究の続行に努めたい。その際、

当時としては大胆であったこの文士たちの試みが、洋書文化移入自体にも寄与した背景についても視野を広げてふれていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 堀啓子	4. 巻 4
2. 論文標題 Charlotte M. Brame著 『ドラ・ソーン(Dora Thorne)』 (翻訳・その18)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東海大学紀要 文化社会学部	6. 最初と最後の頁 102 - 108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀啓子	4. 巻 5
2. 論文標題 Charlotte M. Brame著 『ドラ・ソーン(Dora Thorne)』 (翻訳・その19)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東海大学紀要 文化社会学部	6. 最初と最後の頁 178-183
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀啓子	4. 巻 187
2. 論文標題 三田演説館発～演説のススメ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 福澤手帖	6. 最初と最後の頁 22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀啓子	4. 巻 2
2. 論文標題 Charlotte M. Brame著 『ドラ・ソーン(Dora Thorne)』 (翻訳・その16)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東海大学紀要 文化社会学部	6. 最初と最後の頁 80 - 85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀啓子	4. 巻 3
2. 論文標題 Charlotte M. Brame著『ドラ・ソーン(Dora Thorne)』(翻訳・その17)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東海大学紀要 文化社会学部	6. 最初と最後の頁 169 - 173
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀啓子	4. 巻 3
2. 論文標題 近代日本の名作文学と西洋の廉価版小説の影響関係	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東海大学紀要 文化社会学部	6. 最初と最後の頁 193 - 199
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀啓子	4. 巻 1
2. 論文標題 Charlotte M. Brame著Charlotte M. Brame著『ドラ・ソーン(Dora Thorne)』(翻訳・その15)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東海大学紀要 文化社会学部	6. 最初と最後の頁 pp144-149
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀啓子	4. 巻 6
2. 論文標題 Charlotte M. Brame著『ドラ・ソーン(Dora Thorne)』(翻訳・その20)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東海大学紀要 文化社会学部	6. 最初と最後の頁 pp128 - 133
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀啓子	4. 巻 114
2. 論文標題 19世紀のイギリス文学と『源氏物語』の融合	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 藝文研究	6. 最初と最後の頁 pp133-139
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 堀啓子
2. 発表標題 聴覚から視覚へ 広げられた文学の創造世界
3. 学会等名 椋山女学園大学公開シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 堀啓子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 中央公論新社	5. 総ページ数 280
3. 書名 日本近代文学入門	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------